

定年退職もラクじゃない

還暦フリーター村田憲治

2019年3月末で、12年間勤務した岐阜高校を最後に定年退職しました。

大学卒業後38年間も教員として勤めたんだから、〈定年退職〉というのは相当に感慨深いものなのではないかと考えていましたが、バタバタしてる間にその日を迎えてしまいました。最後の1週間がどんなだったか、書き残しておきたいと思います。

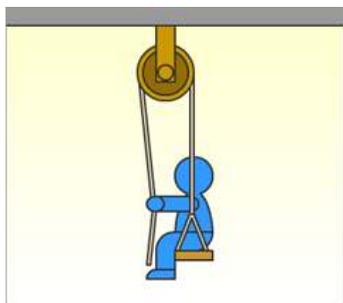
■先生、メシなんか食ってる場合じゃないです

どこの学校でもそうでしょうが、退職したり異動になったりする職員は、3月25日前後に体育館に集められた全校生徒の前でお別れのスピーチをしなければなりません。

この〈離任式〉で、今年は13人が壇上で話をするようになったのですが、トップバッターが定年退職者の僕でした。ホバークラフトに乗って舞台に現れ、火を吹くというアイデアもあったのですが、あんまり過激なことをすると次に話す人に迷惑かなあと思い、無難にスピーチをすることにしました。

岐阜高校で12年、岐阜県の教員になって38年ですが、このたび現役生活に終止符を打ち、引退することになりました。岐阜高校の職員の皆さんや生徒の皆さんには本当にお世話になりました。生徒の皆さんとの思い出は数限りなくありますが、今日は僕にとって最も印象的なエピソードをお話したいと思います。

今から6年前になりますが、僕が指導していた教育実習生(女性)の授業での出来事です。



1年生のクラスで実験を交えた力学の授業(*1)をしていたのですが、授業は指導案通り進まず、授業の中で生徒に提示した課題(問題)に決着がつかないまま、よく言えば〈オープンエンド〉で終わってしまいました。

ところが、起立・礼のあと、数人の生徒が教育実習生を取り囲み、「先生、この力とこの力は、〈作用反作用〉なの？ 私、〈力のつりあい〉と〈作用反作用〉の区別がつかないんだけど」「うん、それはね・・・」などと議論が続いています。

この授業が終わると、次は昼休みです。物理実験室からホームルームに戻るのに時間もかかるし、この状態を放置してよいものか、迷いました。

ふと見ると、机上のノートに物体と力の矢印を描き、頭をひねっている男子生徒がひとりいることに気づき、声をかけました。

「あのさ、もうお昼休みなんだけど。お弁当を食べる時間なくなっちゃうよ」

彼はなんて答えたか分かりますか？ こう言ったんです。

「先生、メシなんか食ってる場合じゃないです」

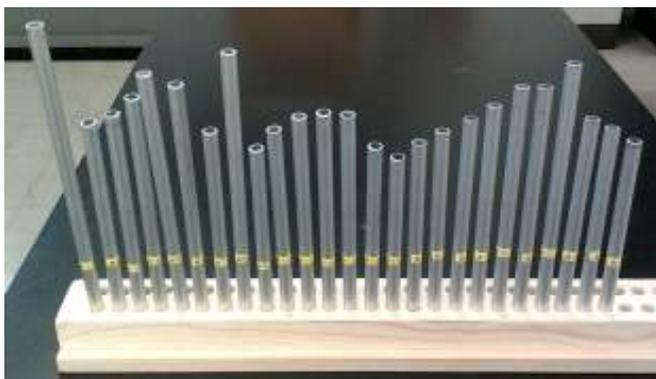
カミナリに打たれたような衝撃を受けました。目の前にあるこの問題の謎を解き明かすこと、大きさに言えば〈この世界がどのようにできているのかを知ること〉が、彼にとってはお昼ごはんよりうんと大切なのです。彼の心の中の何かに火が点いたのです。形式的には中途半端でしたが、結果的には素晴らしい授業であったことに気づきました。そして、これこそが僕たち教師が目指している仕事の理想のかたちなのです。

昼食後に僕のところに指導を受けに来た実習生に思わずこう言いました。

「君は〈大村はま〉か！(笑) 本当に素晴らしい授業だった。君が教員になってくれるなら、俺はいつ辞めたっていいよ」(*2)

彼女は教員採用試験に合格して、●●高校で物理を教えています。結婚して今は育休中ですが、次に本校の物理教員の誰かが異動するときは、彼女を岐阜高校に呼んでくださいね、校長先生(笑)

皆さんも、〈メシより大切〉だと思えるようなことを見つけてください。そういう仕事に出会えることができたらほんとうに幸せですよ。〈幸福な人生〉とは、そういうことなんだろうと僕は思います。いつまでもお元気で、ごきげんよう、さようなら。あ、最後に自作の楽器(バンジーチャイム)で、「星に願いを」を演奏します。



■ シンクロシティとはこういうことか

今井さんに教わって作った色々な長さのアルミパイプを放り投げるだけの楽器〈バンジーチャイム〉で奏でる「星に願いを」は、生徒・職員に大ウケでした。体育館は、音の響きが素晴らしいのです。あとから「先生、あれどうやって作るの？ すっごい素敵だったー」と、同僚や生徒たちから声をかけられました。物理サークルで教わったことが、最後まで役立ちました(^^)

体育館から理科職員室に戻って椅子に座った途端、事務室から電話がかかってきました。

「村田先生、●●高校の■■先生から外線です」

たった今、離任の挨拶の中でふれた教育実習生だった彼女です。受話器から明るく元気な声が響きます。

「先生、お久しぶりです！ お元気でしたか？」

「すごいな、シンクロシティってこういうことか。いま、離任式で君の話をしてきたところだぜ」

「またまた、ご冗談を〜(笑) 村田先生、今年で退職ですよ。今週中にご挨拶に伺いたいんですけど、都合の悪い日ってありますか？」

■いったいこの荷物（ガラクタ）をどうするんだ？

僕は、いわゆる〈再任用〉を希望しなかったので、4月以降は無職の予定だったのですが、「遊んでるなら、うちへ週8時間くらい非常勤講師で来ないか」と声をかけてくれる高校があったので、あまり深く考えることもなくその話に乗りました。

さて、そうすると岐阜高校に置いてある自作の実験装置やらなんやらのガラクタは次の学校でも使えそうです。



とりあえず物理実験室の机の上に出して、力学・電磁気・波動・原子などの分野別に分けてみたら、実験室に12ある机が全部ガラクタで埋め尽くされてしまいました。

「おいおい、これいったいどうするんだ。とりあえず一度自宅に持ち帰らなきゃいけないけど、あと3日しかないぜ」

茫然としつつも面白がって写

真を取り、Twitter や Facebook にアップしたら、やたらにリツイートされたり（いいね！）がついたりしました。こら、他人事だと思ってるだろ。

「これは絶対使わないよな」と思ったモノは、そっと実験室の棚の奥に隠したんだけど(笑)、たいして荷物は減りません。

昔のサークルニュースで小川さんが異動のときの引っ越しの大変さを書いた記事の中に「このままオレが焼却炉の中に飛び込んじゃえばカンタンなのではないか」というくだりがあったて笑わせてもらったけど、その気持ちがよく分かります。

嘆いていても仕方がないな、と気持ちを奮い立たせたときに、件の元教育実習生(育休中物理教師)が現れました。

「うわ、先生すごいことになってますね。

あはは(＾o＾)」

育休から復帰したあと、どうやって子育てと仕事を両立させていくか、というお悩み相談に乗って、ガラクタを一部 彼女に押し付けました(笑) 「一緒に写真を撮ってください」と言うから写真を撮ったらもう夕方になってしまいました。あと2日しかないぜ。



■自宅二階はまるでゴミ屋敷

学校と自宅の距離が 2.5km しかないってのが幸いして、なんとか2日間で荷物を自宅に持ち帰ることができました。でも、二階はテレビでよく見る〈ゴミ屋敷〉みたいな状態になっています。分野別にダンボール箱に入れて、マジックで「力学・円運動」とか書いてはあるんだけど、なにしろ数が多くて大変なことになっています。これで本当にあとから必要なものを見つけ出すことができるのだろうか。

とりあえず実験室の床をホウキで掃き、机を雑巾でキレイに拭き上げて達成感に浸っていたら校内放送がかかりました。

「これより退職職員の退職辞令交付と感謝状贈呈式を行います。お手すきの先生方は大会議室にお集まりください」

慌てて着替えて、他の2人の退職職員とともに校長から退職辞令をもらい、職員親睦会から感謝状と花束をもらい、拍手の中、玄関まで送られてしまいました。

こうなると、クルマに乗って学校を出ないとカッコがつかません。ええ、そのまま帰りましたとも。

「今度バイトで行く学校では、もう少しおとなしくしてないとなー」と決意した3月29日(金) 定年退職の日なのでした。

<http://physics.atnifty.com/>

*1) いわゆる「ペンキ屋の冒険」の授業。なんと岐阜高校物理実験室の天井には定滑車を取り付けてある。

*2) 大村はま：日本の国語教育における偉大な実践家。1980年まで(73歳まで) 公立中学校の現職教諭であり続けた。著書『教えるということ』には次のようなくだりがある。彼女は終戦直後の東京・深川一中で荒んだ子どもたち一人ひとりを羽交いじめにして、自作教材を渡していった。「そうしたら、これはまたどうでしょう。仕事(教材)をもらった者から、食いつくように勉強し始めたのです。私はほんとうに驚いてしまいました。

子どもというものは『与えられた仕事が自分に合っていて、それをやるのがわかれば、こんな姿になるんだな』ということがわかりました。それが無いというときには子どもは『犬ころ』みたいになるということがわかりました。私は。みんながしいんとなって床の上でじっとうずくまったり、窓枠のところへよりかかったり、壁のところへへばりついて書いたり、いろんなかっこうで勉強をしているのを見ながら、隣の部屋へ行って思いっきり泣いてしまいました。そして、人間の尊さ、求める心の尊さを思い、それを生かすことができないのは全く教師の力の不足にすぎないのだ、ということがよくわかりました」

